

東日本大震災における当院の対応

東北大学病院 診療技術部放射線部門 齋 政博

この度の大地震により被災された皆様にはお見舞い申し上げます。

3月11日午後2時46分ごろ、三陸沖を震源とするM9.0の大地震が発生した。

当大学病院放射線部においても、ほとんどのモダリティで検査が行われていたが、かつてないほどの長時間にわたる大きな揺れ、やがて停電となり装置電源も供給されなくなり、当然ながら検査は中断となった。建物、装置等には大きな損傷はなかったが、CTやMR検査においては、検査中の部屋が多く、技師・看護師が大きな長い揺れの中、患者をおさえながら揺れが収まるのを待った。そのスタッフの冷静な対応により大事故になるのを防いだと言えよう。病院全体としても、大きな事故はなかった。

病院は、まもなく災害対策本部が設置され、今後の対応協議に入った。まず多数傷病者受入れのための各部門の被害状況を確認した。放射線部関係としては、まず停電により救急受入れをする救急センター内の一般撮影装置、CT装置が使用できなくなった。非常電源が復旧するまでの間、単純撮影はポータブル装置を使用することとした。CR画像処理装置およびドライプリンター等の周辺機器は幸い100V対応であったので、非常用コンセントに接続し使用可能となった。当院は通常フィルムレス診療であるが、病院ネットワークが使用不可となり、フィルム出力によって画像診断を行った（フィルム在庫が持つかが気かりであったが・・・）。当然ながら、伝票運用とした。CT撮影においては、震災当日はPET・CTが使用可能であったので、そこで緊急CTを2件撮影した。翌3月12日午前には、電源を復旧させ、一部を除きほとんどのモダリティで緊急検査は使用可能になった。病院としては外来診療を休止、3月19日朝までの間、トリアージポストを設置し、震災対応にあたった。その後は、被災地近隣の病院からの広域患者搬送も行われ、当院へリポートには毎日のようにヘリによる患者搬送が行われた。震災直後から9日間にわたるトリアージにおける受入れ件数は、赤：108名、黄：219名、緑611名、黒11名であった。そして通常外来診療受入れが再開されたのは、大震災から11日後の3月22日であった。

このトリアージと平行して行われたのが、福島第1原発事故による緊急被ばくスクリーニングサーベイである。県からの要請により原発事故以来、サーベイの依頼があれば24時間態勢で対応した。現在もオンコールで対応可能としている。病院に直接来院した患者・家族等は病院PET棟にて、県からの依頼は、



星陵体育館にて当院医師、技師、医学部保健学科教職員、県立医療施設の医師、技師が対応した。

最近では、TV ニュース等でも放映されているが、警戒区域の一時帰宅者による被ばくスクリーニングサーベイ支援のため、文部科学省からの依頼で5月22日より当院放射線技師を福島県へ派遣している。

当院では、毎年大規模な災害訓練を行ってきたが、想定外の大規模な災害に対しては、まだ検討の余地がかなりあると思われた。とにかく放射線部としては、何よりも電源供給であるということを改めて知らされた。

これを機にマニュアルを見直し、いかなる災害時にも対応できるような体制作りが必要と感じた。